

然解散する事に決し八日總會を開きて協議したる結果全會一致を以て解散を決議し近々櫻花繚爛の日を卜して

▲盛んなる解散の式を擧ぐる筈なるが此種の事は往々誤謬を傳へられ易きを以つて其明瞭なる理由は追て發表する趣なり 右に就きて同會の主腦たる帝室技藝員黒田清輝氏の座談を聞くに「白馬會は現在外國に在る者と地方の者とを合して會員三十餘名で四月には久米桂一郎三宅克己氏等が歸朝する 實は此人々が歸朝してから會の所思を天下に發表して解散すると云ふが全會の意思である

乃で主なる理由と云ふは現今會員中の者には大分拔群の技倆を有する者も出來思想の變遷も累ねたので私共が當初期した事も著々有終の美果を收めた様である

譬へば我々は油畫とは何麼なるものであるかと云ふ事を知しめる時代に起り畫家とは斯う云もので展覽會は斯様云風にして開くものと嗚呼し乍ら其等の標準を示す爲めに主義主張を以て此團體を續けて來た 所が二三年以來私共の希望して來た公設展覽會も設立され私共の會員の大多數は外國で學んで來た人々となり今は彼標準を示す必要も無なつた 加之世間の人にも油繪が好く解得され同時に鑑識力も一般に進めば製作品を見せる場所も立派に出來上つて居る されば此時に當つて

▲各畫家の特長を示すには團體よりも個人的にする方が適當ではあるまいか 元來畫家は個人の利益とか名譽とかは不問にして只管美術と云ふものに向つて一身を捧ぐ可きものであるが團體は兎角誤認され易い それであるから終りは後進を誤り自分を誤る結

果を生じはすまいか氣遣れる 又私共が明るいつ時に適合した畫を作らねばならぬと云主義は今では畫界の風潮となつて居て最早團體的研究を俟ないので白馬會が特に繼續して仕事をする必要はないのである 故に爾後からは各志の赴く所に從つて驥足を伸す時代ではあるまいかと云ふのが今回解散するに至つた理由で有る 併し相談するとか遊ぶとかと云ふ意味に於て此會を存續するは又別問題である「」猶此會の創立者は久米、小代、安藤、佐野、岩村、故山本、合田、吉岡、長原、藤島、湯淺、白瀧、小林、中澤、北、和田(英)、岡田、和田(三)等の諸氏である

なお、旧白馬會の中沢弘光、山本森之助ら比較的若手の画家たちは翌四十五年六月に光風會を結成し、第一回展を開く。一方、黒田清輝、岩村透らは大正二年三月に洋画家を中心とする国民美術協會を結成し、他の分野の美術家も糾合して新たな団体活動を始める。

⑭ アプサント同人小品展覽會・後期印象派

明治四十四年五月二十日と二十一日の両日、本校日本画科、西洋画科の生徒有志一六名は本郷の帝国大学前の喫茶店パラダイスでアプサント同人小品展覽會を開いた。岡畏三郎はこの展覽會について「後期印象派の影響をうけた人々のグループ展としては最も早いものではなかったか」(「明治末年に於ける△新傾向▽に就いて」『美術研究』一六〇号。昭和二十六年三月)と言ひ、その歴史的意義を指摘している。また、陰里鉄郎「万鉄五郎―生涯と芸術」(一)(同誌二五五、二五八、二六二、二七二、二九〇号。昭和四十三年一月)同四十八年十一月)

や田中淳「萬鉄五郎研究序説——一九一〇—一九一七」(『東京国立近代美術館紀要』第一号。昭和六十二年)などの論文では特に萬鉄五郎との関係においてこの展覧会のことととり上げられている。わが国の洋画界は明治末から大正初期にかけて齊藤与里、高村光太郎ら新婦朝者の文筆活動を発端に印象派、後期印象派、フォーヴィズムその他新傾向絵画が続々と移植され、革命的变化をとげる。特に後期印象派は従来の外光派アカデミズムに飽き足りないものを感じていた青年たちを強く引きつけ、彼らをして個性、自我を絵画表現の基本に置く方向に向かわしめたが、それに先鞭をつけたのがアブサント同人たちであった。

本校の歴史を振り返って見ると、明治三、四十年代には卒業生や生徒の間に種々の小団体が生まれ、展覧会を開いている。丹青会(日本画科卒業生。三十二年)、彫塑会(彫刻科卒業生。同年)、无声会(日本画科卒業生中心。三十三年)、パレット倶楽部(西洋画科生徒および卒業生。同年)、東京美術学校関西同窓会(各科卒業生。三十五年)、彫塑同窓会(彫刻科卒業生。三十八年)、彩友会(盛岡在住各科卒業生。同年)、コスモス会(西洋画科四十三年卒業生。四十三年)、凡々会(日本画科生徒。同年)、赤蓮会(西洋画科四十四年卒業生。四十五年)等々がそれである。このうち、一応表現上の主義によって集まった団体は彫塑会と无声会であり、これに次ぐのがアブサント同人たちの会であった。

このように、近代美術史上から見ても、また、学史上から見ても、アブサント同人小品展には興味深いものが含まれているが、その実態となると必ずしも明らかではない。例えばそのメンバーについても、上記の岡論文に「會の人々は何れも來年「四十五年」卒業

豫定的美術學校の生徒達で、萬鉄五郎、廣島新太郎(晃甫)、平井爲成、山下鐵之輔達であつた。」とあり、これが陰里論文、田中論文に踏襲されているが、その典拠は不明で、その上、主要メンバーの川路柳虹(大正二年卒業)の名前が落ちてゐる。出品作についても具体的に把握できない状態にあり、今後大いに研究の余地を残しているが、ここでは一応その活動の経緯を辿ってみておきたい。

当時の『東京美術学校校友会月報』を見ると、アブサント同人に關係ある記事が最初に出ているのは第九卷第三号(明治四十三年十二月)の「我友の声」欄で、ここに「PRK」(川路柳虹。395頁参照)が、

▲此間「生徒」控所と廊下へ「アブサント小集」と云ふ素敵な廣告が出たので多くの人は「何んだ」と云つて訝つた。この間に對して僕は簡単に説明をして置く、「アブサント」と云ふのは「正宗」と云ふと同じく酒の名である。佛蘭西の酒の名なのだ。夫れ丈けでは解るまいがこれを正宗よりも焼酎よりもウイスキーよりも強い酒なのだ云ふとこの會は酒飲みの競争會かと云ふと決して左様でない、否一滴も「酒」なるものは飲み得ざる臆病者も多々あるのである。この會合では決してまだ酒を飲んだ事はないのだ。ではどう云ふのかと云ふとこれは只在校文藝同好者の雜談會なのである。恐ろしい氣焰の奴ばかり寄るので實際アブサントに酔つた以上に酔つて終ふのである。元のおこりは日本畫の新進氣鏡の某、某氏三名が新しい試みの裝飾畫挿畫の回覽誌をこしらへて「アブサント」と命名したのが始めて、此會合から同志がふえて一種の座談會を起したのがそも／＼である、「アブサント」は

二號まで出てゐる。天下一品のものである。今度は版畫號を出す計畫がある。これは同人が書いて彫つて刷らうと云ふのだ。會合は殆んど毎月ある。大變多く集る時がある、誰でもいいのだ、『ホラの會』と名をつけた事もある、『ホラ』の吹きたい人は進でも來ていゝのである。會費は白銅二つか三つ位の持ちよりで番茶と菓子位の御馳走だ。これは文學部の座談會と見る可きものなのだから大に來てもらいたいのだ。因に來年からは有志の某々氏がよつて在來の俳句會と云つたもの以外に短歌會〔明治四十五年初夏結成の鴨跖草會をさすと思われる。〕を起すと云ふ。大に望ましい。こうして吾々の姉妹藝術に近しくしてゆくことが如何に愉快で且つ有益であるか？……と效能を吹き立てゝ「アブサント小集」を紹介しておく。

という文を寄せている。明治四十年設立の校友会文學部の活動や川路柳虹その他の活躍についてはすでに述べたが、右の文によると、四十三年頃にはこの文學部のなかにさらに文芸愛好生徒たちのグループができ、「アブサント小集」と称する自由な會合を毎月開き、番茶と菓子だけで互いに氣焔をあげ、回覽誌を出していたことがわかる。その中心メンバーは日本画科の新進氣鋭の三名、つまり、文學部で活躍が顯著であつた川路柳虹、広島晃甫、伊藤順三であつた。

次いで校友会月報第九卷第五号（四十四年三月）の「我友の声」欄では「L、L、L」なる人がアブサント會を擴張して大川端あたりにカッフェーカバーを作つて美校生が自由に愉快に談話ができるよ

うにし、展覽會も開こうではないかと呼びかけている。こうした呼びかけが実を結んでアブサント同人小品展覽會が開催されたのである。

この展覽會は新聞に割合大きくとり上げられた。

○アブサント同人展覽會 美術學校洋畫科を中心とせる有志よりなる「アブサント同人」は本月廿、廿一の両日本郷帝大前バラダイスにて小品畫展覽會を催すと 因みに同會は以後バアに據りて屢々展覽會を催し同人の自由な製作を示すと共に九月より「卓上」を發行すと

（四十四年五月十八日『読売新聞』）

○赤門前の展覽會

『これは只、若い感情に生きてみたい若い美術家の或るコレクションでムいます、どうせ見て頂くやうなものはないのでムいます、然し若いものゝ夢みてゐる心と新らしい藝術に生きたい願望とを見て戴けば足りず、その中に芽ぐんでゆく「個性」の素顔と生命とを見て頂けば足りず』是は美術學校の十幾人の生徒から成立つて居るアブサント會の告白の一節で有る 本郷赤門前の西洋料理屋バラダイスを借りて廿、廿一の二日間七十點近くの作品を陳列して居る 其他に故青木繁氏の作品が二點ある 肖像に『かつて學校に在りし時』と畫布の端に畫いた言葉も悼ましい 他の一點を見ては好い畫だ惜しい事をしたと思つた 若い人の作品は微笑して居る 老いたる技巧を嘲笑して居る 若い人の夢は

華やかだ

(同年同月二十一日『日本』)

△アブサン同人展覽會が本郷帝大前のパラダイスにある。これは美術學校生の日本畫科、西洋畫科の始めた展覽會で仲々面白い殊に日本畫科の川路誠君や廣島新太郎君達も油繪やゴアツンでルノアール式やセザン式を盛に試みてゐるのは一寸驚いた

(同年同月二十五日『帝國新報』)

アブサント同人畫會 正宗得三郎

〔中略〕僕の行つた時は、狭い二階は殆んど學生で一杯であつた、新しい藝術は、新しい人の集合を得、若い人は若い人の集合を得るのは自然の源則である。

周囲のニートラルチントの幕は餘りいゝ色ではなかつた、會との調和を缺いてゐる、八角形の林檎や、ボンやりした裸躰や、五色の色が段だらに重なつて、目の無い女や、光に晒された、緑の木立がある、コバルトや、ガランソガ食出^{〔ニヒコ〕}してゐる。

それから狭い暗い梯子段を上つて三階に行くと會のK君や、A君があられた。

前面に大きな目をした、口唇の厚い、青木繁君の自畫像がある。ライトレッドやバンドシンナーや、ビチュウメンが、こゝでは殊更に色深く見せた、その傍^{そば}に同氏の黄泉比良坂がある。

その左右にルノアールの「小本」や、ドガーの「浴み」^{〔林忠正カ〕}の寫眞がある。會のK君に聞くとこの原畫は、林某氏が所藏せられてゐる。

る、まだ他に澤山ある相だ、こんな會にでも借して見せたらいいのに。」K君や、A君と二階に下りて、食堂に這込んだ、そこには、アブサンに酔つて臥てゐる人や、唄つてゐる人がある。淡青^{淡青}い盃や、黄金色をした盃や、赤いイチゴを盛つた皿や、赤い顔は、アンプレシヨニストの畫を見る様だ。窓の向に大學の赤煉瓦の建物がある、青い木立の間に強いハルモニーを描いてゐる、此頃の夜は霧が立ち込めてウイスマラーの畫の様だと隣で話してゐる。

若い人、若い物、若い藝術、氣持のいゝものである、何日迄も酔つたアブサンの香が失せずにはゐられる事を祈つてゐる。

(同年同月二十九日『読売新聞』)

校友会月報にも勿論この展覽會のことがとり上げられた。それは第九卷第八号(四十四年六月)の「た、か生」(田辺孝次)による「白百合會とアブサント同人洋画展覽會」と題する批評である。これは同時期に開かれた彫刻科有志による白百合會展とアブサント會展を對比しつつ論じたもので、アブサント會については、強烈な刺激を与えるものであり、対社会的氣分すなわち意志表示を有しており、斬新奇抜であるが、善く言へば新しい試みの自由大胆な発表ではあるものの、悪く言へば写眞版複製の研究結果にすぎないとしており、さらに、出品者が多すぎて煩雜であつて、一種のお祭り騒ぎに近いことや、會と何のゆかりもない青木繁の遺作なども並べたことを批判している。

これらの記事によれば、この展覽會にはルノアールやセザンヌの作風に倣つた作品など、斬新な作品が多数出品され、会場が學生で

いっばいになるほどの盛況だったことがわかる。日本画科の見甫や柳虹が油絵やグワッシュで制作したというのは、日本画、西洋画などという障壁を無視して新しい芸術をめざそうとする若々しい気持の現われだったのだろう。青木繁の遺作二点は卒業制作の自画像と「黄泉比良坂」のことで、本校から借り出して展示したらしい。

「わだつみのいろこの宮」を東京勸業博覧会（四十年三月）に出品したのを最後に郷里の久留米に去った青木が落魄のうちに病死したのはこの展覧会より二ヶ月前のことで、蒲原有明ら友人たちが新聞にこの天才の悲劇的な死を悼む文を寄せたのもまだ記憶に新しくあった筈であるが、敢えてこれらを展示したのは青木の芸術に対する共感を表明するためだったのであろう。なお、田辺孝次が同人たちと何のゆかりもない青木の遺作を並べたとして非難したことは先に述べたが、校友会月報第十卷第一号には「アブサント小僧」と「もう一つの小僧」の反論が載っており、それによると同人の「K君」は青木と長く起居を共にしていたという。

さて、このような展覧会を開くにはそれ相当の準備が要るが、一体どのようなかたちで後期印象派の研究が始まったのであろうか。その点について鍋井克之は『中央美術』第六卷第四号（大正九年四月）の広島見甫論特集のなかで次のような注目すべき発言をしている。

今のデモクラシーや労働問題のやうに、その頃では後期印象派と云ふものが美術界の危険思想と見做されて居た。私達仲間の美術学校の生徒等は毎日教室に這入つても何となく落着いた態さまがなく、中にはモデルの寫生などを靜かにやつて居られないで、朝か

ら文庫に潛り込んで、貧弱な圖書の中から新しい洋書の寫眞版と首つ引をして一日を過して了ふ様な者もあつた。丁度その頃から解剖的器畫法に見たものゝ比較や寫形と云ふものが、全然物尺ものぢ的の見方から解放せられかゝつて來た。寸法の物尺の換りに心の魂の物尺でものを寫さなければならぬと云ふ様な自覺が若い畫家の頭に芽出す様になつたのである。それは私が學校の二三年の時分と思はれるが、さう云ひながらも、まだ／＼その革命に與くみする者は全體から見れば極く少數の者に限られて居たのは云ふ迄もない、その中に『日本畫に大變新しい人が二三人集つて特別な研究をして居る者がある』と云ふ噂が私達の洋畫の方の教室に迄聞えて來た。その後の事であるが、或日私が何の氣なしに日本畫の教室を覗くと、誰も居ない室の中に、二三枚の木炭の人物畫がついぞ見なれぬ奇怪な描法で畫きかけてあるのを見て驚いた。全く私は初めはフット一人で吹き出しさうになつた程妙なものにそれを感じた。西洋畫科に居た私から見れば、それは木炭畫が描けないところから仕方なしに、歪いびゆがみ曲つたものであらうと云ふ氣がしたが、然しそれにしても何かの面白さがその曲りひねくれた中に潛んで居るやうにも思へた。その奇怪な畫が先きの噂の新しい日本畫科の生徒の作品で、その中の一つが見甫廣島新太郎君の繪であつたのである。

それから一二年する中には世間でも後期印象派が危険なものではないと云ふ事が段々解つて來た。アブサントとかフェウザンとか云ふ革命的な展覽會も開かれた。

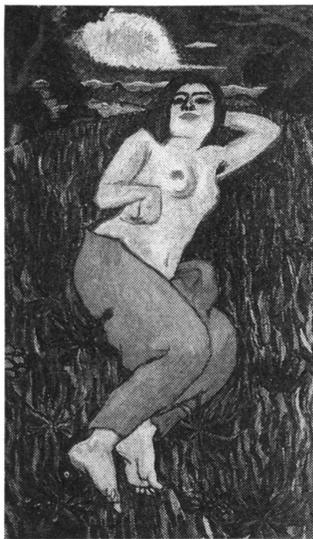
日本画科で「特別な研究」つまり後期印象派の研究をしていた二人というのは鍋井が名前をあげている晃甫と、その仲間の川路柳虹、伊藤順三らであった（中村岳麓のものに加わったらしい）。この三人は卒業制作の際も揃って斬新奇抜な作品を描いたが、彼らは新しい作風を教室で早くから試みていたらしい。鍋井（四十三年四月入学）は、自分がそれを知ったのは、二、三年の時分、つまり四十四、五年頃であったと言っているが、実際はもっと早かったかも知れない。柳虹らが四十三年四月の「緑色の太陽」に強い刺激を受けたことは既に述べたが、新しい作風の研究はその頃から始まっていたのではなからうか。

柳虹らは洋書の写真版などを手懸りに躍起となって研究したらしい。当時、本校の文庫が購入していた外国雑誌といえは Art Journal, Gazette de Beaux-Arts, International Studio, Art et Decoration, Chronique des Art などを含む二十数種である。熱心の余り、こうした洋書や、あるいは和書から挿絵を剝ぎ取って停学になったのが晃甫である。これについては鍋井克之が前掲書のなかで次のようなエピソードを伝えている。

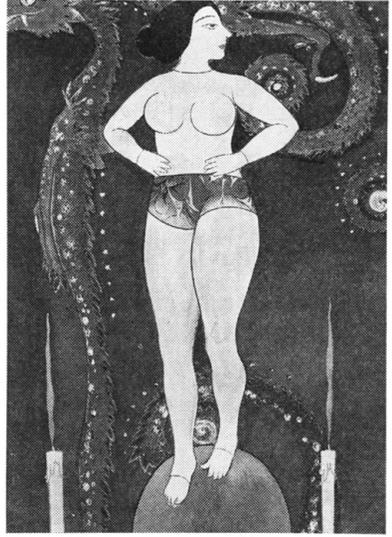
丁度彼が學校を卒業〔四十五年〕せんとする間際の出来事であったが、その頃學校の圖書閱覽室の書物の中の挿繪が時々剝ぎ取られて困ると云ふ事が教務の人達の中での問題にされて居た。それがどうもいつも閱覽室で本を見ながら悠々として惡びれた風もなく、自分の好むがまゝに剝がして居る學生を時折見たと云ふ人があつて、到頭その疑ひが彼にかゝつたのであつた。そこで校長が

一日彼を呼び出して、『藝術を愛するあまり、若しやそんな事が二度あつたのではないか、それならば公にしないで済みたいから』と云ふ風に彼を暗に諭したのであつた。すると彼はその翌日自ら校長の前に現れて『ハイこれだけです』と云つてその剝した挿繪を束ほど校長の机の上に投げ出した。これには流石の校長も驚いたばかりではなく、さう云ふ風に堂々と明らさまに事を破つて了はれては、もうどうする事も出来ないで、今度は校長の方で仕方なく恐る／＼彼をとら／＼幾日かの停學に處罰して一先づ事が治つたと云ふ譯であつた。

この事件は正木直彦の『十三松堂日記』第一卷（昭和四十年。中央公論美術出版）の明治四十五年二月五日の項にも「今日は日本畫科教員の會議を召集して文庫にて藏書中の挿畫を窃取せる生徒の處分を議したり 残念なることなり」と記されており、晃甫は停學を命ぜられて他より三ヶ月遅れて卒業した。ただし、その卒業制作「玉乗り」は同期の萬鉄五郎の卒業制作「裸体美人」に優るとも劣らぬ斬



卒業制作 萬鉄五郎筆 裸体美人 明治45年 東京国立近代美術館蔵



卒業制作 広島新太郎（晃甫）筆
玉乗り 明治45年

新なもので、本校日本画卒業制作のなかでも抜きん出ている。

このように、新しい画風の研究はまず日本画科の生徒の間に始まり、それが西洋画科にも広まって行ったらしい。その媒介となったのがアブサント小集で、萬鉄五郎などもメンバーに加わっていたものと考えられる。尤も、萬と柳虹、晃甫らの交流の場はアブサント小集のみではなかった。灰野庄平は前出広島晃甫論特集のなかで次のように述べている。

廣島君を思ふ時、私は先づ自分の學生時代〔灰野は帝大美学科卒〕を其處で過した千駄木の愛靜館を連想して来る。夏目漱石氏の猫の家の眞向で太田の森を挟んで森鷗外氏の邸がある。生田長江氏の超人社と呼んで居た城の様な家も一丁程の處にあつた。

年上の人では千葉勉君、佐々木林風君、小林源太郎君などが居た。川路柳虹君や、齋藤素巖君や江口漢君などはみんな學生時代

だつた。三木露風君、柳澤健君、山宮允君、なども来た。昂^{すば}の江南文三君、萬造寺齋君、江馬修君などもよく来た。大野隆徳君はよくマンドリンを抱へて来た。水島爾保布君、萬鐵五郎君もよく話し込んで居た。歌人の牛田良平君へツベル學者の上村清延君も話に來た。結城素明氏も立寄つた。ローレンス先生がやつて來て私が怪しげな英語で通辯をやつたこともある。此家は私にとつての小さいワイマルだつた様だ。私が藝術上のコンヴァルシオンを経験したのは此家に居た時である。

廣島君は此のワイマルの一人であつた。吾々は廣島君を『沈黙』と呼んで居た。その頃メエテルリンクの私淑者だつた私が、いつも黙つて居る廣島君につけたニックネームが、いつか此集團には通り名になつて居た。

ここに結城素明の名も登場しているが、柳虹の「追憶—美術学校時代の広島晃甫」（『広島晃甫画集』昭和三十年。広島希求子）によれば、当時日本画科助教であつた素明は「絵画、ことに日本画」というものの伝統的技術と新しい芸術精神との相剋苦闘の境地を自分で開拓しようとする生徒たちの試みをよく理解していたという。

次にアブサント同人の会の結末であるが、同会は翌大正元年十二月六日から十五日まで博多のライジングサン石油会社跡の世界館で「アブサント」洋画展を開き、浜哲雄、萬鉄五郎、川路柳虹、藤田嗣治、辻永、太田三郎、斉藤与里、戸張孤雁らを含む三十余人が二〇〇点余りの油絵、水彩画、パステル画、半切画などを展示し、同時に青木繁の「海の幸」「わだつみのいろこの宮」以下一〇数点の

遺作を展示した（『青木繁・坂本繁二郎とその友』竹藤寛。昭和六十一年。福岡ユネスコ協会。ほか）。この年の秋には齊藤与里、萬鉄五郎らのフューザン会と川路柳虹、伊藤順三らの行樹社がともに第一回展を開いており、その両方のメンバーがこの「アブサント洋画展」に出品したようだ。その後の消息は不明である。

なお、アブサント同人たちが発行を計画していたという『卓上』（50頁『読売新聞』記事参照）について言うと、これと同名の雑誌を美術店田中屋の田中喜作と川路柳虹が大正三年四月から約一年間発行している。その間に何らかの関連がありそうだ。田中らの『卓上』は毎号富本憲吉の木版画を表紙に用い、田中、川路、梅原龍三郎、齊藤与里、岸田劉生、石井柏亭といった新進批評家、作家たちが執筆している注目すべき小美術雑誌である。これについては復刻版『卓上』（平成二年。京都書院）の別冊「解説・総目次」に懇切な解説（熊田司著）がある。

⑮ 創立記念式と朝倉文夫の講話

明治四十四年十月四日、新築講堂で恒例の創立記念式が行われ、朝倉文夫の南洋見聞談講話があった。正木直彦は『十三松堂日記』に、

十月四日 水曜日 雨 美術學校創立二十三年目の記念日なり
新講堂に於て紀念會を開く 余か式辭の後に近ころ南洋ポルネオより歸朝せる朝倉文夫將來物を示して旅行談をなす ベルナイ土人の銅器各種は其雅趣云ふへからざるものあり 其製作も亦薄手

にして技巧の妙を見る 餘興として橘流筑前琵琶 松林伯知の講談あり

と記されており、また、

十月二十四日 火曜日 晴 朝倉文夫來訪 同氏ポルネオブルナイより將來したる古銅タンパッションレを學校參考品として購入のことを決定す〔下略〕

ともある。

朝倉は実兄渡辺長男が井上馨銅像製作を受託した際にその原型製作を担当したが、製作中に友人から南洋探検隊参加に誘われ、井上馨の援助を受けて明治四十四年二月二日に出発。ポルネオ、シंगाポール、ジュバン、ジマシャ等に滞在して同年九月二十七日に帰国した。『東京美術学校校友会月報』第十卷第四号には右の創立記念日における講話の筆記を多少布衍した内容の「南洋の話」と朝倉が持ち帰った工艺品および南洋風俗の写真が掲載されている。